

近世信州における秋葉信仰のひろがり

市川 包雄

一 はじめに

遠州（静岡県）秋葉山^{あきはま}を中心とする秋葉信仰が火防の信仰として広く庶民にまで定着したのは、近世になってからである。貞享二年（一六八五）の秋葉祭り^①がきっかけとなって全国的にひろまったとされる。遠州に隣接する信州にも信仰がひろまり、秋葉神社が勧請され秋葉講がつくられた。それにともなって信州からも秋葉山にむかう道として、赤石山脈と伊那山地の間の中央構造線にそった道が秋葉みちと呼ばれるようになり、秋葉山への参詣の道として利用された。

明治維新の神仏分離をへて、現在では秋葉山（静岡県春野町・龍山村）山頂の秋葉神社、八合目の秋葉寺、さらに静岡県袋井市の可睡斎（秋葉寺の本寺）の三か所がそれぞれに信仰を集めている。^② いずれも一二月一五・一六日に火祭りをおこなう。秋葉神社の祭神は火之迦具土神であり、秋葉寺と可睡斎では秋葉三尺坊をまつる。これらは近世においては一つの秋葉山として信仰を集めていた。

秋葉信仰と秋葉みちについては、田村貞雄監修の『秋葉信仰』^③に共同研究としてまとめられている。そのなかに長野県側からの秋葉みちについては、沖和雄「秋葉街道覚え書」^④がある。静岡県教育委員会と長野県教育委員会はそれぞれ『歴史の道調査報告書』^⑤を出している。これらによって、秋葉信仰や秋葉みちについて多くのことが明らかになってきている。^⑥ しかし、秋葉山の地元の静岡県に比べると長野県側の研究はまだ進んでないのが現状である。各市町村誌にふれられることは増えているものの信州全体をとおしての考察までにはいたっていない。

そこで本稿ではまず秋葉信仰と信州とのかわりを『秋葉山縁起』によりみる。次に地域的なひろがりを秋葉神社・秋葉講の分布状況や三峰信仰などの山岳信仰との比較で検討する。さらに秋葉山の参詣の道として信州からどのような道筋が利用されたのかを各地の道中日記によって明らかにする。なお本研究は、平成一二年度長野県立歴史館秋季企画展「歴史の宝庫 秋葉みち」での調査研究がもとになっている。

二 秋葉信仰と信州のかかわり

1 秋葉山略縁起

秋葉信仰のようすを知る手がかりとして、秋葉山縁起が各地に残されている。長野県でも南信濃村に「遠州秋葉山本地聖観世音三尺坊大権現略縁起」^⑦が現存する。略縁起の年月は享保二年（一七一七）七月である。縁起としてこの享保二年のもの（享保縁起）が多く確認されているが、安永六年（一七七七）成立と推定される『秋葉山縁記』（安永縁起）^⑧などもある。

享保縁起の内容を簡単に記す。秋葉山は行基の開基であり、本尊の聖観音が行基の作であるとする。守護神の三尺坊は観世音菩薩の権化であり、利益として第一に弓箭刀杖^{きゅうせんとうじょう}の難、第二に出火類焼の災難、第三に大水沈没の難以下計一三の災難から逃れることができるとしている。つづいて信州生まれの三尺坊が、越後蔵王堂で修行して飛行の術を身につけて白狐に乗って秋葉山へ飛来したことが書

かれる。火防の利益として武田信玄が攻めてきたときに観音堂など堂社が焼け残ったことをあげている。

この縁起の内容について、田村貞雄は「秋葉寺の立場を明らかにしたもので、流行神として拡がることによって幕府の再禁圧がかかることを恐れ、秋葉信仰が邪神、愚俗ではなく、聖観音信仰を中核とする由緒正しいものであることを強調するねらいがあった」と述べている。その後の信仰のひろがりによって略縁起は大きな役割を果たしている。

2 三尺坊の出生地について

火防の信仰の中心に位置づけられている三尺坊が信濃の出身であることはいずれの縁起とも一致している。「安永縁記」には、信州戸隠の生まれとなっている。さらにこのほかにもさまざまな説がある。「秋葉信仰」には伊那郡千代村(飯田市)、高井郡穂高村(木島平村)、水内郡戸隠村の三か所があげられている。これについて次のように検討が加えられている。千代村説は『袖師町誌』にあるが、典拠が明らかではない。穂高村説は長光寺に出生伝承があるというが、史料の誤読である。戸隠村説は宝光社神主岸本家の伝承がもとになっているもので、近世にはかなり広くに受け入れられ遠州秋葉山周辺でもこの説は唱えられていた。千代村説の典拠はないということであるが、静岡県清水市の秋葉山では三尺坊は、信濃国下伊那郡千代村の出身で、観音への願掛けで出生したと伝えているという。

第二の説の長光寺は現在曹洞宗であるが、もともとが医王山長興寺という天台宗の行者の修行地であった。越後から来た秋葉三尺坊が本尊の薬師如来に誓願し満願となったときに、如来の眉間から長光を放ち三尺坊を照らしたという寺伝がある。このことから秋葉山長光寺となった。弘仁三年(八二二)ころに行基作の薬師如来が安置されたのをはじまりとし、三尺坊が越後から来たということもあわせて遠州秋葉山と共通した伝承を持っている。『長野県町村誌』¹⁾には「僧三尺坊旧地」として穂高村和栗の銀杏と石祠を紹介している。ここでは三尺坊は遠州秋葉山から来たことになっている。いずれにしても出生伝説は存在していない。

三つ目の戸隠説であるが、可睡斎でも戸隠出生としている。秋葉信仰が戸隠・飯縄信仰と密接な関係を持っていることは、すでに指摘されていることである。¹²⁾『秋葉信仰』には、戸隠宝光院・秋葉三尺坊大権現本宮の祭主岸本文穂が、「戸隠三尺坊の由来」という文を寄せている。

このほかに伊那郡松島村(箕輪町)が出生地と考えられている。矢澤喬治によると、松島の明音寺につたわる三尺坊の由来に「本生地は信濃国伊那松島なりと古老の伝説にあり」とあり、茅野市の頼岳寺の縁起には「当国伊那松島ナル北割村ハ古ヘ北村ト云フ、共ノ所ノ庄屋ノ子ナリ、ソノ元ト秋葉ノ別当ナル明音寺ニ依テ聞クコトヲ得タリ」とある。元禄八年(二六九五)明音寺に入った八世窓越格門が遠州周智郡の出身であり、秋葉信仰に篤かった。そのため享保三年(二七一八)に寺内に秋葉権現を勧請したという。¹³⁾

三 秋葉信仰のひろがり

1 秋葉権現・秋葉神社の勧請

信州で秋葉信仰にかかわって年代のわかるもっとも古い石碑は、上伊那郡高遠町の「書面金剛」碑である。元禄六年(二六九三)の年号が刻まれたこの碑には、「^(左)かしを道あきは道」とある。この碑は、諏訪から伊那へぬける金沢みちと秋葉みちの分岐点にたてられていた。ちなみに遠州では天竜市にある貞享四年(二六八七)の「^(右)かうみやう・あきはみち 左しなのせんかうしみち」という双体供養塔がもっとも古いとされている。貞享二年(二六八五)の秋葉祭りから年月をおかずにこれらの碑ができ、秋葉山への道を秋葉みちとしてよんでいることは、急速に秋葉信仰がひろまったことを証明するものといえる。

年代的にみると、出生地説に出た木島平村の長光寺は元和六年(二六二〇)の開基である。また正徳元年(二七一二)須坂藩主堀直祐によって蓮生寺に勧請されたという秋葉三尺坊があるが、先にあげた享保三年(二七一八)の松島村明音

表1 秋葉権現・秋葉神社の勧請年

年	郡村・記事	出典
元禄年間	水内郡荒安村・新安神社、戸隠山から秋葉大神を勧請	長野市誌
延享2 (1745)	佐久郡春日村・狐に乗った神像がある。	望月町誌
延享4 (1747)	北安曇郡社村・遠州秋葉山より勧請。	長野県町村誌
明和5 (1768)	北安曇郡美麻村・2月24日勧請。	長野県町村誌
文政年間	水内郡権堂村・名主善右衛門が遠州から神像を勧請。弘化2年の地震で焼失。安政2年秋葉大権現金印と前立尊像を勧請。	長野市権堂町史
安政2 (1855)	水内郡権堂村・遠州秋葉山から神像を勧請。	長野市誌

寺の秋葉権現の勧請が村でおこなった初期のものになる。

秋葉神社の勧請された年代が伝わっているものを一覧にした(表1)。遠州秋葉山からの勧請と伝えられたものとしては、延享四年(一七四七)安曇郡社村(大町市)あたりが早い時期になる。また長野市稲里の氷飽八幡社には寛延四年(一七五二)の石碑がある。長野市権堂の秋葉神社はもとと十念寺にあった秋葉三尺坊の堂を移したものであるという。

松代藩では堂宮調査を元禄一〇年(二六九七)におこなっている。この調査では、諏訪明神(二〇八)、伊勢社(二九四)、地藏堂(二六三)などが上位を占め、秋葉社は記録されていない。その後松代藩では再調査が何回かおこなわれた。そのうち天保一〇年(二八三九)はくわしくおこなわれた。『上水内郡誌』によると、中条村など六か村での集計で、元禄一〇年には一社も記されていない秋葉神社が天保一〇年には伊勢社(五〇)、稻荷社(二六)に続き金比羅とともに第三位(二〇)になっている。上位にある稻荷社や金比羅も元禄調査にはまったくみられない。全体の堂宮数も一一七社から二八六社と二倍半に増えている。このことから秋葉信仰は元禄以降、金比羅信仰などとともにひろまったことがわかる。

明治初期の秋葉神社の存在を『長野県町村誌』によって

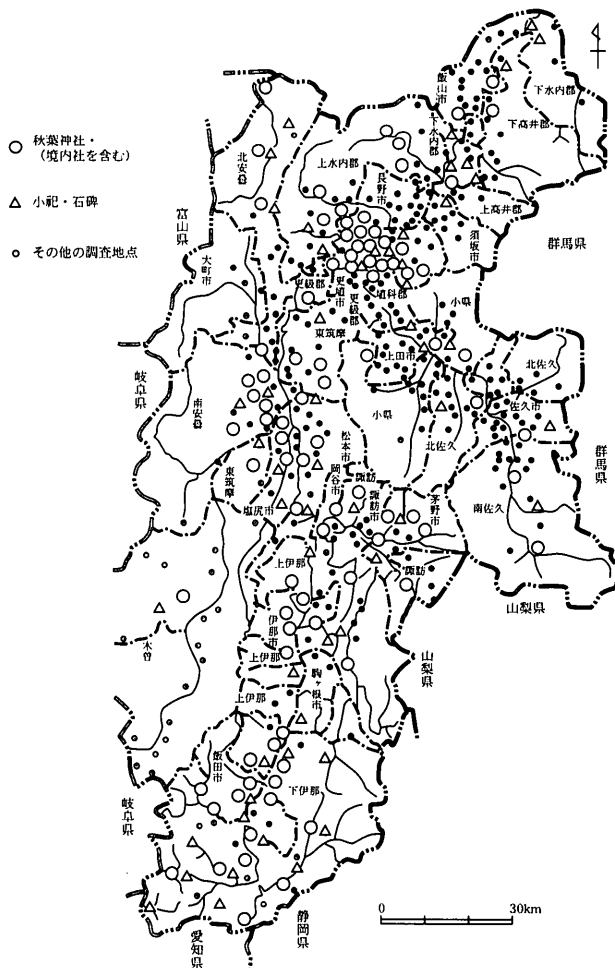


図1 長野県における秋葉神社の分布
(注)『長野県史』民俗編より作成。

表2 明治初期長野県の秋葉神社(社)

地区(秋葉社数)	郡	秋葉社数
北信(83)	上水内	47
	下水内	0
	上高井	6
	下高井	2
	更級	28
東信(36)	埴科	9
	小県	17
	北佐久	5
	南佐久	5
南信(58)	北安曇	4
	南安曇	10
	東筑摩	18
	西筑摩	2
	諏訪	15
	上伊那	5
	下伊那	4
全県		177

(注)地区区分は『長野県町村誌』記載による。

みる(表2)。この集計によると上水内郡にもっとも多く存在している。このほか更級郡など長野盆地の周辺に多い。戸倉町などでは辻に背丈くらいの石柱の上に石祠があり、それを「秋葉様」としている。これは蚕の神ということになっていて、養蚕と火の信仰が結びついた事例である。伊那地方の神社数が非常に少なく、調査に問題があると考えられる。現存する秋葉神社などの分布を『長野県史』民俗編をもとにみていく(図1)。調査地点の制約はあるが、木曾地方・佐久地

方などが少なく、伊那地方から東筑摩・更級・上水内郡にかけて多く分布している。秋葉山縁起にある三尺坊が通った越後蔵王堂から遠州秋葉山への道が浮かび上がってくるように思える。そこには戸隠山・飯縄山の存在もみえてくる。

2 秋葉権現碑の分布

伊那地方では秋葉山の名号塔が各地にみられることが報告されている。『喬木村誌』によると、村内に三基の秋葉みち道標と一九基の「秋葉大権現」碑がある。名号塔の年号の刻まれたものでもっとも古いのは享保年間である。年号のわかるもので多いのは、天明から寛政期にかけての碑である。

下伊那郡高森町には「秋葉山大権現・金比羅大権現」碑が二一基、別々に建てて並立しているのが八基、秋葉山単独のものが八基ある。このうち文政六年（一八二三）の牛牧村の碑は高さ四メートルという巨大なものである。このほか、伊那郡にのこる大きな碑は、文化文政期から天保期にかけて建てられている。

下市田村（高森町）の文政一二年（一八二八）建立の碑は、その経過が日記に残

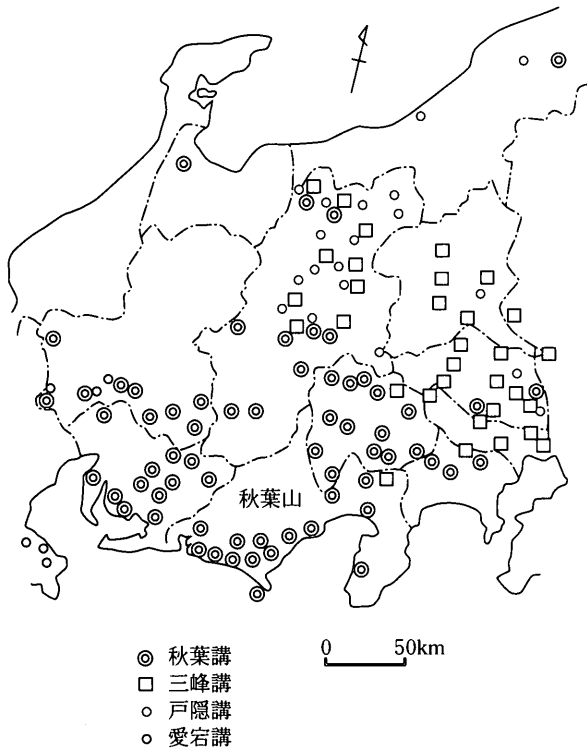


図2 中部日本におけるおもな山岳信仰の講
(注)『日本民俗地図』より作成。

されている。碑文は京都智積院の道本が書いたものである。道本は佐久郡下中込村（佐久市）の出身で、京都に出て智積院などで活躍した僧であり書は有名であった。道本の碑文ができたのは四月のことだった。道本は神号が書けたことや刻字の注意事項を書簡で送ってきている。一〇月一日に秋葉塔について村で相談があり、石屋作料二両として米一斗ずつを集めることが決まった。一三日には智積院へ礼として真綿を送った。十一月一日に秋葉塔が建立され、泉寿院へ依頼し塔の開眼を三日におこなった。そして二月一九日に石屋へ勘定をして終了した。名号塔は秋葉と金比羅と一緒に刻まれるものが多い。文字は「秋葉大権現」が多いが、「秋葉大神」もみられる。

3 秋葉講の分布

『日本民俗地図』をもとにもおもな山岳信仰の講の分布を長野県の周辺部をふくめて地図にした(図2)。一九七二年(昭和四七)に発行されたこの調査報告では、長野県においての山岳信仰の講は、秋葉、三峰、戸隠の三つが中心であった。秋葉講は東海地方から長野県南部や山梨県にかけて多く、埼玉・神奈川などの関東諸県にまで分布している。三峰講は関東地方に広く分布し、長野県では東北信に多い。『埼玉県史』によると三峰講の数は圧倒的に長野県が多い。戸隠講は長野県内では三峰講と重なるような分布であるが、一部新潟県や関東地方にも広がっている。さらに秋葉信仰と同様の火防信仰の愛宕講は、この調査では長野県には認められず、岐阜、滋賀、三重など京都に近い諸県に存在している。

このうち三峰信仰は神使としての山犬への信仰であり、眷属(けんぞく)信仰ともいい、埼玉県秩父の三峰山がその中心となっている。盗難除け、火防の利益があるとして家や土蔵に札をはる。この点では静岡県山住信仰と共通する。もともと三遠南信地方の焼畑では、火入れをするときには秋葉札をたて、種まきしてからは山住札をたてたという民俗があった。三峰も山住と同様にあつかわれ、猪や鹿の害を山犬が防ぐという山の信仰が平地の村や町にひろがっていったものと考えられる。さまざまな災難をよけるという利益は秋葉信仰につながるものがある。

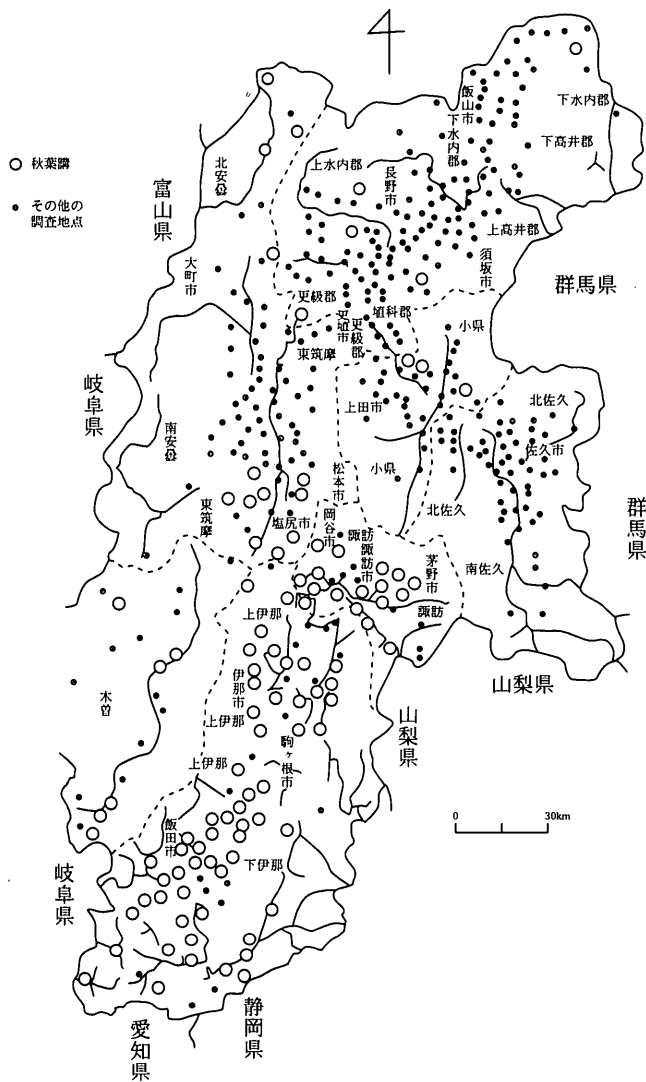


図3 長野県における秋葉講の分布

(注)『長野県史』民俗編より作成。

信州の秋葉講についてみていく。『長野県史』民俗編の秋葉講の分布を地図にした(図3)。これによると南信地方に非常に多くの講の存在が認められ、東筑摩郡・松本市までは講のひろがりが見られる。南信地方では調査地点の七割をこえる地点で講が現在おこなわれているか、最近までおこなわれていた。秋葉神社の分布と比較すると、木曽郡で神社数にくらべ講の数が多く、逆に北信地方で講の数が少ない。東信地方はさらに少なく、とくに佐久地方は調査地点に限ってではあるが講はみられない。

歴史的に講の状況がわかる例をあげる。諏訪郡神戸村(諏訪市)では宝暦五年(二七五)に秋葉講が始まった⁽²¹⁾。隣村の上桑原村普門寺の秋葉神社には、「秋葉講中宝暦六丙子四月吉日」の石灯籠がある。神戸村南組には代参の記録も明和元年(一七六四)から残されている。「秋葉代参冲右衛門彦分五百文」というものだが、これは伊勢講の代参帳に書かれている。伊勢講のなかで秋葉山参詣もおこな

われたものとみられる。火事が実際にあって、秋葉山日待や代参をおこなった記録もある。文化一三年(二八二六)に大火にあい、その一年後に日待をおこなった。文政八年、九年(二八二五、六)には続けて付け火があり、日待と代参をおこなった。このように実際の火事があったことが秋葉信仰をひろめる直接の契機となった村も多かった。

四 秋葉山参詣の道筋

1 秋葉みち

秋葉山への道はすべて秋葉みち(秋葉街道)と呼ばれる。そのルードは図4のようであり、ここでは八つのルートに分類している。信州にかかわる代表的な道として、掛川からの第一ルート、鳳来寺からの第六ルート、飯田からの第七ルートがあげられる。ここではそれぞれを遠州秋葉みち、鳳来寺秋葉みち、信州秋葉みちと呼ぶこととする。なお飯田からの小川路峠越えが通行量では主体となっていくが、高遠からの分杭峠・地蔵峠越えのルートのいずれも信州秋葉みちとして考える。名古屋方面からの参詣者を対象とした年不詳の「秋葉山参詣道法図」⁽²²⁾には信州側は描かれていないが、水窪の北に「秋葉山裏坂、此の方信州諏訪より善光寺道」と書かれている。三河や遠州からは、この道を諏訪と善光寺への参詣の道として考えていたことがわかる。⁽²³⁾

秋葉信仰がひろがるとともに秋葉山への参詣がさかんになった。秋葉講で代参するものや個人的におこなった参詣があった。さらに秋葉山を主たる目的地にした旅だけではなく、伊勢参りや西国巡礼の途中で秋葉山によるということが頻繁におこなわれた。ここでは信州各地の道中日記をもとに秋葉

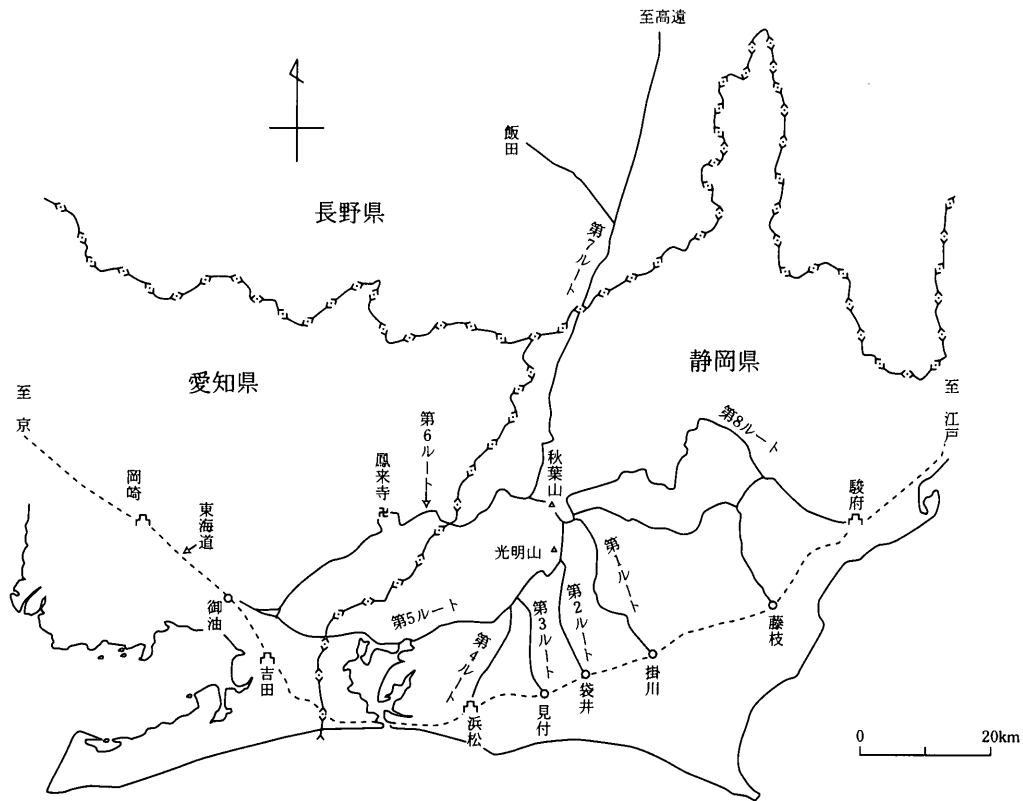


図4 秋葉みちの全体概略図

(注) 遠山佳治「秋葉山常夜燈からみた秋葉街道」『秋葉信仰』156ページにより一部加筆。

山への参詣の道筋を検討する。

2 秋葉山への参詣

秋葉山参詣を第一の目的とした旅の例をあげる。文化三年（一八〇六）の伊那郡山吹村（高森町）からの旅と弘化三年（一八四六）の伊那郡中村（飯田市）からの旅である。文化三年は旗本座光寺氏の家臣片桐源栄らの二人旅で、弘化三年は孫右衛門ほかの三人旅である。この二つの行程はかなり似ている（図5）。

文化三年の旅からみていくと、まずは天竜川をわたって小川路峠をめざすところから旅が始まる。小川路峠を越えて一日目は遠山郷の門村（上村）で宿泊した。二日目は木沢・和田などの村むらを通り青崩峠へむかう。青崩峠を越えたと遠州であり、水窪で泊まった。三日目は水窪からの道は信州秋葉みちをいったん離れ、天竜川を渡って神妻神社へ参詣しそこで宿泊している。四日目はいよいよ秋葉山の参詣であるが、信州秋葉みちにもどって秋葉山奥の院（竜頭山）へ西から上って参詣し秋葉山へとむかっている。そしてその日は秋葉山に宿泊した。

弘化三年の旅は、やはり天竜川を渡り小川路峠を越え信州秋葉みちを南下した。一日目は木沢、二日目は水窪に宿をとり三日目に秋葉山参詣をしている。天竜川ぞいを基本コースとした文化三年の旅にたいして、こちらは山住山から秋葉山奥の院を経由する尾根道ルートを通っている。なおこの道の途中で孫右衛門らは、同じ村の下中村の人と、さらに近隣の三日市場村の人たちに出会っている。

ほぼ最短コースを通った往路に対して、復路はここからいずれも往路と同じ道をもどることはしていない。秋葉山から遠州秋葉みちを南下して東海道へ抜けていく。いくつもの寺社を参詣しながら東海道を西へむかい、豊川稲荷などに寄り、次には伊那街道を北上して鳳来寺山などの参詣をして帰村している。このほかに文化の場合では薬師（油山寺か）、法多観音（法多山尊永寺）、五社、鴨江観音などを参詣し、弘化では大頭竜（大頭竜神社）、法多山、小笠山、小松原山などを参詣している。これらは参詣地として当時から広く知られていたことがわかる。

宿泊については、参詣者を泊めたり休憩させた宿が秋葉みち沿いの各地にあり、

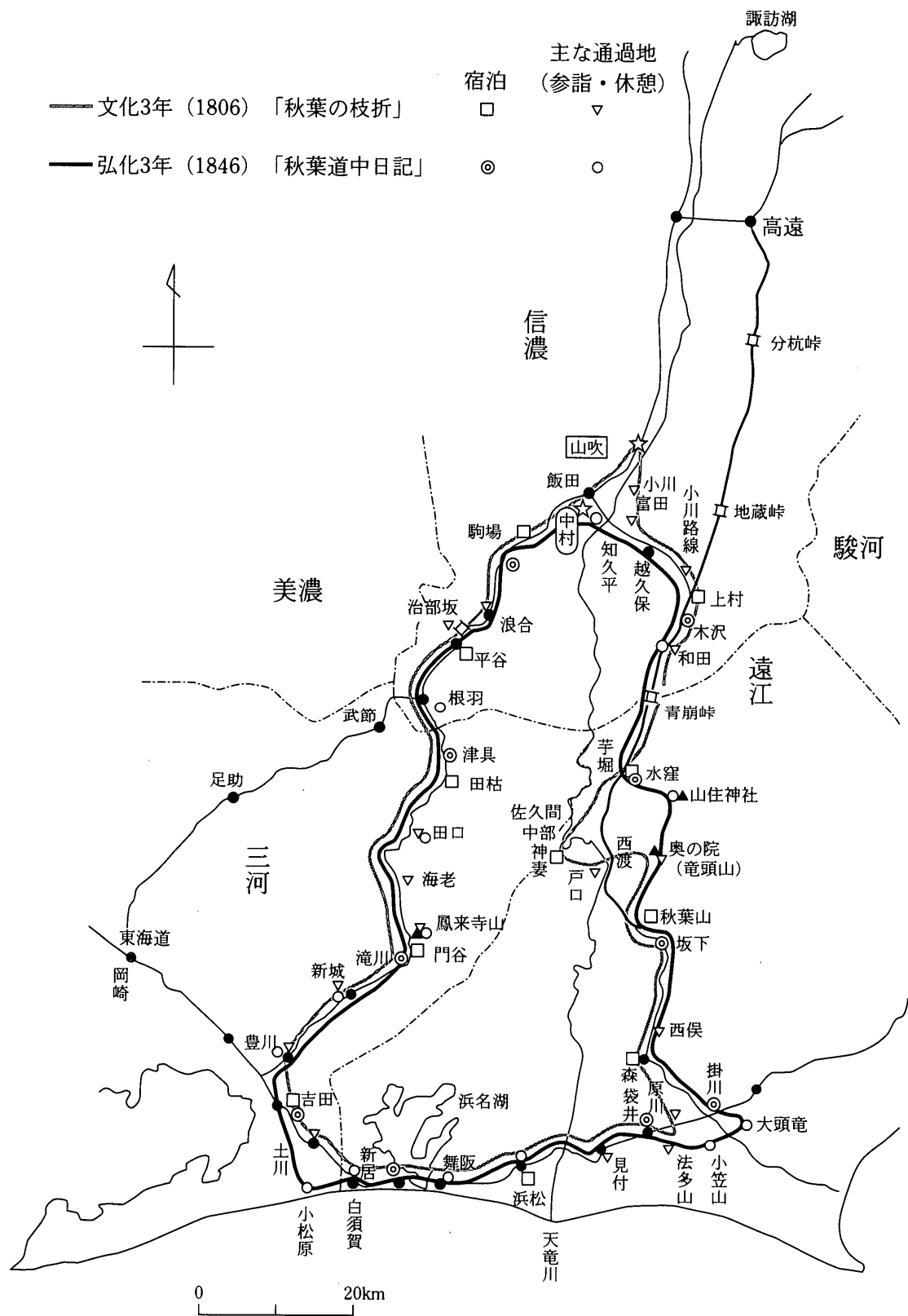


図5 秋葉山参詣の行程図

表 3 秋葉山参詣の道

年	明和 7 1770	文化 3 1806	文化10 1813	文政 6 1823	文政 7 1824	文政 7 1824	弘化 3 1846	弘化 3 1846	嘉永 5 1852	明治20 1887
出立月日	1 月 6 日	3 月24日	12月14日	2 月10日	1 月 6 日	1 月15日	2 月 3 日	10月21日	1 月 6 日	2 月 3 日
帰着月日	3 月 4 日	4 月 6 日	2 月 2 日	3 月14日	3 月13日	3 月下旬	不明	11月 2 日	2 月28日	2 月23日
日数	58日	12日	49日	33日	68日	約 2 か月	不明	11日	53日	21日
郡	佐久	伊那	水内	筑摩	埴科	佐久	諏訪	伊那	小県	諏訪
村	三河田	山吹	吉窪	岡田	森	五郎兵衛新田	塩之目	中	長久保古町	普門寺
現市町村	佐久市	高森町	長野市	松本市	更埴市	浅科村	茅野市	飯田市	長門町	諏訪市
秋葉みちの利用										
①信州みち		○	●	●			○	○		
②遠州みち	○	○			○	○		○	○	○
③鳳来寺みち	○		●	●	○		○		○	
(往路○、復路●)										
目的地	西国巡礼	秋葉山	金比羅	伊勢	伊勢	伊勢	金比羅	秋葉山	金比羅	伊勢
他のおもな参詣地										
①鳳来寺山	○	○	○	○	○		○	○	○	
②豊川稻荷	○	○		○	○		○	○		○
③身延山	○				○	○			○	
④諏訪大社					○				○	
⑤伊勢神宮	○		○	○	○	○			○	○

この二つの旅でも利用された。秋葉みち沿いの宿では、文化三年は上村の小松屋、水窪の和泉屋、森の升屋で宿泊し、弘化三年は木沢の中屋、水窪の和泉屋、坂下の高木屋、掛川のねじ金屋を利用している。明治になってからであるというが、高木屋などが中心になり、各地に一新講社という組織を作っておたがい宿の紹介をした。高木屋は秋葉山の麓から参道を上る入り口に位置し、多くの参詣者を宿泊させた。秋葉山参詣の拠点ともいえるべき宿である。明治期に高木屋で作った地図には、木沢の中屋、島畑のふじや、水窪の和泉屋の名もある。

弘化の旅で食事の内容がわかるものとしては、スズキやタコなどが記されている。海の幸などを楽しみにしていたようすがうかがえる。ウナギも酒とともに楽しんでいる。交通関係では、主として歩きの旅であるため、わらじの購入が三回あった。舟渡しが三回と駕籠に一回乗ったというのが歩き以外の手段であった。土産としては、浜松の駒下駄、田口の安神散がある。安神散は女性の薬である。

中村の孫左衛門は、このほかにも何度か秋葉山参詣をしている。そのうち安政五年（一八五八）は秋葉山と江戸の道中日記である。このときは青崩峠を越えてからの道筋が前回と変わっている。天竜川ぞいを行き日入沢から秋葉山へ上るコースをとった。山住山からの尾根道とこの日入沢からの道が信州からの秋葉参詣の主要なルートとなっていた。

この旅では越久保の木下屋で昼食をとった。日記には、「越久保木下屋にて昼弁当少々致す、もっとも此の家は御用宿にて此の処一番の宜しき宿なり」と書かれている。かつての木下屋には「秋葉山 秋葉寺定宿 役寮」の看板が現存している。秋葉山から正式に認められた宿だった。ここには「一新講社」の看板もある。

秋葉山は通常は女人禁制となっていた。しかし女性の参詣もみられた。伊那郡島田村（飯田市）の庄屋の妻都々子は、文政五年（一八二二）に浜松の実家へ帰る途中で参詣をした。青崩峠をこえて秋葉山参詣をしたあと天竜川を舟で下った。このとき都々子は女人禁制を知らずにいたとみられ、山でだれかにいけな

明治になっても鉄道が敷かれる前は近世の旅と基本的に変わりがなかった。一八八五年（明治一八）の上久堅からの旅は、小川路峠越えの秋葉みちを通り西渡から日入沢を経て秋葉山に参詣している。その後のコースも近世の旅と似ている。法多山や豊川稲荷、鳳来寺山などにも参詣している。ただし近世に参詣していない寺社もいくつか登場する。注目されるのは可睡斎と半僧坊である。可睡斎へは明治の神仏分離で秋葉三尺坊などの仏像、その他仏具が移転している。一八七三年（明治六）五月に秋葉寺はいったん廃寺となり、秋葉山には秋葉神社のみがおかれることになった。一八八〇年（明治一三）に秋葉寺の復興がなされ、翌年に本尊聖観世音などは返却されたものの、秋葉三尺坊については可睡斎に留め置くことになった。秋葉三尺坊の像あつかいについては、可睡斎と秋葉寺の主張に食い違いを生じているが、可睡斎が秋葉三尺坊の火防信仰の参詣の対象に明治以降になっていった事実が指摘できる。半僧坊信仰も明治になってからさかんになったものである。

3 伊勢・金比羅などへの参詣と秋葉山参詣

『長野県史』通史編⁽²⁹⁾の伊勢参り行程によるとそのうちの半数が秋葉山に寄っている。伊那郡・筑摩郡からの旅がいずれも飯田から小川路峠越えの秋葉みちの利用である。これにたいして佐久郡からは、佐久甲州道を南下して身延山参詣をし、東海道へ出て、東海道から遠州秋葉みちを利用して秋葉山への参詣をおこなっている。このほか市町村誌などで紹介されている参詣の例をみていく（表3）。

諏訪郡からの旅の例として小川路峠越えのルートを通った道中がある。天保二年（一八四二）に神戸村南組では総勢五九人の伊勢参宮がおこなわれた⁽³⁰⁾。このうちの二二人が伊那からの秋葉みちを通して秋葉山参詣をした。この神戸村には南組・中組・北組にそれぞれ秋葉神社が勧請されている。弘化三年（一八四六）、塩之目村（茅野市）の六右衛門は金比羅参りの際、高遠、伊那富村（辰野町）を経て越久保（木下屋泊）から上村に入っている⁽³¹⁾。

水内郡吉窪村平林（長野市）の文化一〇年（一八一三）の旅日記では、金比羅・

伊勢を巡った後に東海道を東へ行き、御油宿から鳳来寺山へむかい、鳳来寺秋葉みち経由で秋葉山参詣をしている。参詣したのち青崩峠越えで信州に入っている。その後は、小川路峠を越えて小野・会田などで宿泊して帰村した。このように復路に参詣した例もみられた。

埴科郡森村・倉科村（更埴市）の八人が文政七年（一八二四）におこなった伊勢参宮のときには、東海道掛川宿から秋葉山へ行っている⁽³²⁾。一行は、和田峠を越えて諏訪神社秋宮と上社に参詣して、甲州道中を行き甲府城下経由で鰍沢^{かじみざわ}に向かった。鰍沢から富士川を舟で下り、東海道に出て遠州秋葉みちを使って秋葉山に参詣している。その後大野宿を経由しているので鳳来寺秋葉みちを利用したとみられる。

小県郡にも和田峠を越えて諏訪大社下社を参詣し、甲州道中を経由して富士川を下り東海道から秋葉山へ参詣した旅日記が残されている⁽³³⁾。目的地は伊勢と金比羅であった。嘉永五年（一八五二）一月六日、長窪古町（長門町）を出立した七人は三四歳を筆頭に二〇代五人、一〇代一人という若い男たちであった。諏訪神社下社春宮を詣でたあと、甲州道中を東へむかい、甲府城下を見物、そこから釜無川・富士川を下り身延山を参詣した。そこから東海道へ出て駿府城下を見物し、秋葉みちを北上し一五日に秋葉山へ行った。その後かれらは、鳳来寺山によってから伊勢へむかっている。金比羅からの帰路は中山道を経由して下諏訪によって帰村している。

諏訪郡からは、明治になってからであるが、小県郡と同様に甲州道中を利用して富士川を下り、東海道経由で秋葉山参詣をおこなった旅日記も残されている⁽³⁴⁾。伊勢参宮へむかった一行一九人は、豊川稲荷にも参詣している。

信州各地からの秋葉参詣の行程をまとめてみる。信州秋葉みちを利用が確認できたのは、伊那郡・筑摩郡・諏訪郡・水内郡からの旅であり、これまでにみた近世の例はすべて飯田からの小川路峠越えである⁽³⁵⁾。諏訪郡からは、甲州道中を利用して富士川沿いを南下して東海道へ出てから遠州秋葉みちを行く場合もあった。埴科郡や小県郡からは中山道を諏訪まで行き、あとは富士川・東海道経由で秋葉

山へ行く道をたどっている。佐久郡からは、佐久甲州道を南下してやはり富士川・東海道経由で遠州秋葉みちを利用している。

五 おわりに

近世信州における秋葉信仰のひろがり、次のようにまとめることができる。

(1) 秋葉信仰と信州のかかわりでまず注目されるのは、秋葉山の縁起にみられるように、火防信仰として秋葉信仰の中心となっている三尺坊は信州出身とされていることである。戸隠など各地に出生伝説が残されているが、場所の確定はできない。とりあえずは、三尺坊の飛来したという伝説の越後蔵王堂と遠州秋葉山を結ぶ山岳信仰の道にあたる信州は秋葉信仰のさかんな地域であり、伝承も多いことが指摘できる。

(2) 信州においても秋葉信仰が貞享二年（一六八五）の秋葉祭りから間もなくひろがりはじめた。元禄期以降には、各地で秋葉神社や秋葉権現が勧請され秋葉講がつくられた。石碑などの年代からみて、寛政期から文化文政期にかけての信仰のひろまりは顕著である。遠州に隣接した南信地方でとくにさかるといえるが、松本・東筑摩地域から北信地方にかけても信仰のあとが多くこのされている。更級・埴科・上水内の各地域に多くの秋葉神社の存在が確認できる。現在秋葉講がおこなわれていない場所でも神社や石碑など信仰のなごりがみられる。

(3) 秋葉信仰のひろがりとともに、遠州秋葉山への参詣がおこなわれるようになった。秋葉山へむかう道が秋葉みちとよばれるようになり、信州でも青崩峠を越える道が秋葉みちとして利用された。とくに文化文政期以降はいくつもの道中日記がこのされており、参詣のようすがわかる。分析の結果、伊那・諏訪地域や松本・東筑摩地域からの旅は、小川路峠越え信州秋葉みちを利用したことがわかった。また北信地方からも信州秋葉みちの利用がみられた。埴科・小県・佐久の各郡からも秋葉山への参詣がおこなわれているが、

秋葉山を主目的にした旅の例は見いだせず、しかも東海道からの遠州秋葉みちの利用であった。

今後、安曇や木曾など参詣の実態が明らかになっていない地域や、信仰のあとが残されているが、現在は講などほとんどみられなくなった東信地方などの研究を進めることで信州における秋葉信仰の実態をさらに明らかにしたい。

注

1 秋葉祭りとは、秋葉三尺坊をまつる興の村送りをさしている。多くの人が参加し、遠州から駿河や伊勢にまでひろがったという。幕府は秋葉祭りの禁止をしたが、信仰は急速にひろまった。

2 このほかにも静岡県清水市、神奈川県小田原市、愛知県熱田市、新潟県栃尾市などにも秋葉信仰の拠点が存在する。

3 田村貞雄監修『秋葉信仰』（雄山閣、一九九八年）。

4 沖和雄『秋葉街道覚え書』（一）（四）『伊那』二二（二）二卷、一九七三年〜七四年。『秋葉信仰』には、このうち（一）を収録。

5 『静岡県歴史の道 秋葉街道』（静岡県教育委員会、一九八三年、新訂版一九九六年）。『歴史の道調査報告書 秋葉街道』（長野県教育委員会、一九八四年）。

6 歴史学、民俗学、宗教学それぞれの立場から秋葉みちと秋葉信仰についての説明が進められている。秋葉みちについては、柳田国男が『東国古道記』（『定本柳田国男集』第二集、一九六二年）で中央構造線にそった道に注目して以来の研究の積みかさねがある。秋葉みちにそった地域は、南北朝時代に南朝の勢力範囲であることなどの指摘がされている。

遠州における秋葉信仰のはじまりについて、『龍山村史』（龍山村、一九八〇年）や『春野町史』資料編一原始古代中世（春山町、一九九二年）、同資料編二近世（一九九四年）をまとめた坪井俊三の研究では、徳川家康が武田氏と断交してから越後の上杉謙信に使いを送り、越後蔵王堂の院主を秋葉山の連れてきて住まわせたことにあるとしている。そしてその院主周国は戸隠宝光院の出身であったという。

歴史学では、田村貞雄が精力的に研究を進めている。信州街道と呼ばれる静岡県相良町から秋葉山への道の変遷の解明からはじまって、近世末の「ええじゃないか」の際の

- 秋葉信仰の役割についてなどの研究をおこなっている。静岡県のみでなく周辺の県や西日本にまで範囲をひろげた研究をおこなっているが、基礎的研究として、秋葉をまつる寺社の全国的な調査の必要性を訴えている。民俗学では、焼畑農耕と火の信仰が秋葉信仰の基盤にあることが指摘されている。また石造物の調査が進展し、秋葉信仰関係の碑などの所在が多数明らかになってきた。しかし秋葉講についての研究はまだ多くない。宗教学では、秋葉修験の研究や曹洞宗の立場からの研究がみられるが、明治維新の神仏分離の影響で史料がほとんどないという制約を抱えている。
- 地域的には静岡県と愛知県での研究がさかんであり、長野県はそれらに比べるとまだ研究の積みかさねは少ない。南信地域では多くの事例が紹介されているものの、全県的には伊勢講や伊勢参りほどの関心が払われていない。
- 下伊那郡南信濃村 遠山礼蔵。
- 田村貞雄によると安永六年成立である。表記は原本にあわせて「安永縁記」とする。『秋葉信仰』二八七ページ。
- 田村貞雄「史料解題」『秋葉信仰』二八九ページ。
- 吉田俊英「秋葉信仰の成立」『秋葉信仰』三〇〇～三二二ページ。
- 『長野県町村誌』（長野県、一九三六年、調査は明治前期）。
- 田村貞雄「序論―秋葉信仰研究史素描」『秋葉信仰』五～六ページ、佐藤真人「秋葉山三尺坊小考」『秋葉信仰』四九～五〇ページ、など。
- 矢澤喬治「松島の秋葉信仰の変遷」『伊那路』四四巻第五号、二〇〇〇年）。
- 霜田巖「松代藩宮改帳」について『長野』創刊号、一九六四年）。
- 『上水内郡誌』歴史編（上水内郡誌編集会、一九七六年）一二四～一二六ページ。
- 『長野県史』民俗編（長野県、一九八五～一九八九年）。
- 『喬木村誌』（喬木村誌刊行会、一九七九年）八三〇～八三二ページ。
- 林登美人「伊那谷一の秋葉山大権現・金比羅大権現塔」（高森町有線放送原稿、一九九六年）。『高森町史』（高森町史刊行会、一九七二年）一一四～一二二ページ。
- 『日本民俗地図』（文化庁、一九七二年）。
- 一九四〇年の調査では長野県は一一四〇の講があり、第二位の埼玉県の九一四を大きく上回っている（『埼玉県史』別編「民俗」二、埼玉県、一九八六年、九三～九五ページ）。
- 『諏訪 四賀村誌』（四賀村誌刊行会、一九八五年）二六四～二六九ページ。
- 『歴史の宝庫 秋葉みち』（長野県立歴史館秋季企画展図録、二〇〇〇年）五四ページ。
- 近年さかんに言われるようになった「塩の道」として秋葉みちをとらえた場合には、その起点を静岡県相良町におき掛川を経由し、信州秋葉みちを北上、諏訪への道として紹介されている。参考として、有賀競・野中賢三『秘境はるか塩の道秋葉街道』（印刷センター、一九九三年）などがある。
- 『秋葉の枝折』高森町歴史民俗資料館蔵。
- 『秋葉道中日記』飯田市中村 久保田真規蔵。
- 飯田市上久堅 木下心平蔵。なお南信濃村木沢の中屋にも同様の看板が保存されている。
- 渡辺和敏「東海道と秋葉街道」『秋葉信仰』一三一～一三二ページ。
- 清水与智光「秋葉参りの昔と今」『伊那』三八巻、一九九〇年）、塩沢一郎「秋葉参道中記」にみた奥山半僧坊『伊那』三八巻、一九九〇年）。なお明治期の青崩峠越えの利用については、大原千和喜「秋葉道に寄せる人々の心―宿帳を通して見た」あきはみち」（一）～（七）『伊那』四七～四九巻、一九九九年～二〇〇一年、継続中）が詳しい。
- 『長野県史』通史編近世三（長野県、一九八九年）五八九ページ。
- 『諏訪 四賀村誌』二六四ページ。
- 『茅野市史』中巻（茅野市、一九八七年）八八四～八八五ページ。
- 小出章「旅日記」『文化財保護』第二一巻第四号、一九九五年）。
- 『更埴市史』第一巻近世編（更埴市、一九八八年）二八〇～二八一ページ。
- 『長門村誌』（長門町誌刊行会、一九八九年）三八七ページ。
- 『諏訪 四賀村誌』二六五ページ。
- 上伊那郡美和村（長谷村）には、一八九〇年に分杭峠を越えて秋葉山参詣をした記録が残されている（『長谷村誌』歴史編、長谷村誌刊行会、一九九七年、一〇九二～一〇九五ページ）。なお『長谷村誌』では、高遠町的場からの道を「裏街道としての秋葉街道」と規定している。